



Title	卷頭言
Author(s)	芒亭
Citation	各務時報
Issue Date	1930-06-30
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/77665">http://hdl.handle.net/2115/77665</a>
Type	column
Note	出典：各務時報 44号 昭和 5年 6月 30日、各務時報 45号 昭和 5年 8月 25日、各務時報 46号 昭和 5年 9月 25日、各務時報 47号 昭和 5年 11月 25日。
File Information	A008_1936-52S4-S6_Part3.pdf



[Instructions for use](#)

卷頭言

人は死ぬまで學んで居るのだと云ふ考へもある。一生が練習であり研究であると云ふのである。自分丈の心持ちとしては其れでよいのかも知れぬ。

だが社會は人の一つ一つの行爲を練習だとは見做さない。完了した一つ一つとして嚴格に評價して又事實其によつて動いて居る。

夏季休暇を利用して校友諸君は牧場や營林署や工場に實社會の經營の實習に出掛ける事になつて居る。其場合諸君は自分の仕事を練習だと思ふかも知れぬが、諸君に托された生きた社會の其一部局は良くも悪しくも一つ一つ諸君によつて完成されて行くのである。そこでは、やり直ほしは出来ないのだ。

人生と歴史とは一回勝負の連続らしい。

(芒亭)

卷頭言

筆者は今長良川上流最奥の部落のお寺の一角に居る。昨夜少しお酒を呑み過ぎたので頭がはつきりしない。此部落の一青年が北海道に移住すると云ふので昨夜お寺で送別の大宴會が開かれ私も招かれて其席に列する光榮を得た。

「先生様も踊れや」

「踊りは知らんぞなア」

「そんなら歌へや」

「歌もニガ手でなア」

「そんなら呑め」

やかうしてとろ／＼腰がた／＼ぬまで酔はされてしまった。

「先生ありがたうございます」送られる青年が私の前に来て端然と坐つて挨拶した。私は其時どんな事を云つたかはつきり覚えて居ないが一時に酔ひが覚めるまで随分ムキになつて其青年を激勵する言葉を連ねた。其時私は口では強く彼を勵まして居たが胸ではたしかに泣いて居た。彼が出て行かなければならぬ社會的規定と彼の前途とが私には餘りにはつきりして居たからである。

「北海道の自然と人生よ。此青年をよろしくたのむ私は今もさう念じて居る。(芒亭)」

(九月十九日郡上郡高鷲村字鷲見にて)

卷頭言

靜かなる夏の夕べ椽側近く燈火をつるせば前栽の縁は殊の外に麗はしく打ち水の露滴々と雫して涼味いと深し。  
ふと靜かなる土の上に動くものあり。コガネ虫の斷末魔のものがきなり。蟻の一群が其を遠巻きに圍みて隙もあらば斬り込まん氣色なり。如何になるらんと興深く眺め入るも夏の夜の徒然の草となり。

隙を見て弱りたるコガネ虫の前肢に組みつきたる勇者あり。コガネ虫は力まかせに蹴やれども及ばず。蟻の勇者次ぎ／＼に現はれ早や幾十を知らぬ蟻、コガネ虫の二本の強き後肢を除きては到る處にとりつきて、指揮する者もあるらしく、二足三足引ずりて行く。何思ひたるかコガネ虫、俄かに渾身の勇をしぼり出し小蟻どもを忽ちに拂ひのけたるが、力はそれまでにして又再びぐつたりとなり蟻の群再び押し寄せたり。

時なる哉、命なる哉、嘗ては空中を飛翔し地上を下瞰しては蟻などには目もくれず、其黄金色の羽を陽光に輝かしたる榮耀の身なりけり。其性糞を好む處より糞／＼と無難なる異名なども下されたれど、そは口さがる人間のはしたなき業なり。

又引きすられ始めぬ。今度こそは愈々蟻の穴に連れられて行くかと思へば、又一時に力を振り起こし蟻の群を拂ひのけたり。斯くの如き事幾度なるを知らず。

夜が更けて涼味身にしみ睡魔漸く催すれど、コガネ虫の餘命はまだ絶えずらし。

床に入りて眼をつぶれば、コガネ虫の時折ガバとはね返るけわひ蟻のうごめく様暫く眼を去らず

(芒亭)

卷頭言

郡上節の一つにこんながある。

「向小駄良の牛の子を見やれ、

親が黒けりや子も黒い。」

これはまさに遺傳の法則だ。

自信ある百姓の聲を聞いたか。その體驗の中には必要なる一節の法則を會得して居る。

其はゆがめられた科學の法則では無く、生きな潔癖の爲めに色々のよいものを拭ひ落して居る。

秋まさに酣、想ひ夜毎愈々深し。

科學者よ。さびしくはないか。

(芒亭)